

挿絵に見る *Fabulous Histories* 出版の変遷

多田 昌美

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第49号抜刷）

挿絵に見る *Fabulous Histories* 出版の変遷 “A Historical Study of the Illustrations of *Fabulous Histories*”

多 田 昌 美

Mrs. Trimmer 作 *Fabulous Histories. Designed for the Instruction of Children, Respecting their Treatment of Animals* (London: T. Longman, and G. G. J. and J. Robinson, and J. Johnson. 1786. xi, 227 17.0×10.5. 以下 *Fabulous Histories*と略記する) は、裕福な家の庭先に巣をかけるこまどり一家の子育ての物語と、その家に住む人間の子ども達がさまざまな实例を見、話を聞きながら、動物に対する正しい態度を学んでゆく様子が交互に語られる、創作長編物語である。再話・要約版も含めると15社あまりから120年以上にわたって出版され続け、第二次大戦後も出版目録に記載されていた、非常に長命な作品である。英国児童文学史における主要な初期作品の一つであることは間違いないが、従来は18世紀末の教訓物語の典型例であり、過去の遺物であるとする一面的な受け止められ方がしばしばなされてきた¹⁾。しかし、本作品の出版の変遷を仔細にたどると、教訓性のためだけに読まれ続けたのではないことが分かってくる。特に拙論「100年後の *Fabulous Histories*」で指摘したように²⁾、19世紀末以降に輩出した再話・要約本は、いずれも人間中心の部分を大きく削り、こまどりの雛の成長を描いた、後の動物ファンタジーにも通じる部分に焦点を当てたものになっていた。

ところで児童書においては、作品世界の構築には本文だけでなく、挿絵も大きな役割を担っている。吉田新一は「イラストレーションをめぐる諸問題——イギリスのケースで考える」で、挿絵は文章の一部をイタリックで強調するように、場面を引き立たせ、叙述全

体を全く違ったものにする一方、実際の読者から想像力を駆使する自由を奪う作用もある、というM・ハンチャーの見解を紹介している³⁾。挿絵はその本を手にとった読者が共通して持つイメージとなり、描かれた場面は読者の印象に強く刻まれる。挿絵は画家や出版社がどのように物語を解釈したかの反映であり、作品中の何を読者に向けてアピールしようとしたのかを知る手がかりとなる。そこで本論文では *Fabulous Histories* の挿絵に焦点をあて、その変遷を詳しく検討することで、本作品が「こまどりの物語」として読み継がれたことを視覚面から実証してゆきたい。

Fabulous Histories 出版の変遷

挿絵について検討する前に、本作品とその出版の流れについて概観しておく。

Fabulous Histories (1786) は、こまどりの視点によるこまどり一家の子育ての物語と、人間側から描かれた、こまどりが巣をかけている家の姉弟が動物に対する正しい態度を母親から教えられる過程の物語が交互に語られるという、二層構造を持つ作品である。二つの物語は別個に存在するのではなく、こまどりがこの家でえさをもらったり、けがをした雛がこの家の子どもに保護されたりと、何度か交わりながら進んで行く。二つの物語は分量的には半々であるが、こまどりの話の方が雛の誕生から巣離れ、そして子別れと、一貫した流れを持っているのに対し、人間の物語は次々に起こる出来事が併置されていることなどから、こまどりの物語の方が軸になっていると考えられる。また、こ

の作品のこまどりは言葉と感情を与えられており、雛は人間の子どものように兄弟喧嘩をしたり珍しいものに目を見張ったりする。拙論「動物ファンタジーの先駆的作品としての*Fabulous Histories*」で指摘したように⁴、現実の動物に子どもの心性を与えたために生じた面白さが、この作品の新しさであり、長く読まれる原動力にもなったと考えられる。なお初版には、挿絵は全く用いられていなかった⁵。

その後、初版を踏襲した版は19世紀末まで出版され続ける。系列としては①初版にほぼ同じもの（1844年のThomas Allman 版までを確認）②一部に入れ替え・章立ての変更があるもの（1807年に第8版⁶として出版。事件の省略はないものの、入れ替えや章立ての変更が行われている。1870年代のFrederick Warne版などに受け継がれた）③事件の省略がみられるもの（1848年にGrant & Griffithから出版。初版に含まれていた愚かな大人を巡る事件をそっくり省略した部分があり、教育的配慮も強くなっている。Griffith & Farran版（1869）、T. Nelson & Sons版（1875）などがこの流れに属する）の3つがあり、①は19世紀半ばで姿を消すものの、②と③は19世紀後半にも複数の出版社から出されていた。

本作品には再話・要約版も多い。現在までの調査で判明した限りでは、最も早いのが1793年のDarton and Harvey版である。19世紀末以降には再話・要約本の出版が盛んになり、英国の出版目録等によれば、20世紀初頭までに8種類の異なる版が出版されていた記録がある。

挿絵の変遷

次に、挿絵の変遷を具体的に見てゆきたい。取り上げる各版の概要と挿絵の特徴は次の通りである。なお引用図版は縮小してある。

1. 19世紀半ばまで

* (anon.) *History of the Red-Breast Family. Being an Introduction to the Fabulous History, Written by S. Trimmer.* London: Darton and Harvey. 1793. 78, [1]. 9.7×8.8.

先に触れたように、1786年の初版では挿絵は用いられていなかった。本作品で挿絵を用いた最初の例は、（これまで調べた限りでは）1793年のこの再話版である。

本版は1793年と、再話・要約版の中ではもっとも初期に出版されたものである。人間の視点による部分を大幅に減らし、こまどりの物語にしていること、こまどりの視点による部分でも、教訓が長々と語られる部分に省略が見られること、物語の後半では省略が多い一方、雛を巡る出来事が付け加えられていること、などが特徴である。文体は初版のものを生かしながら、難解と思われる語を言い換えて読みやすくしている。

再話者の名前も前書きもないため、どのような人物がどういった経緯で出版したのかは不明である⁷。しかし、*Fabulous Histories*が出版当初から人気を博していたことや、文体や内容がいささか難しく、また長いと考えられていたこと、そして何より*Fabulous Histories*が当初からこまどりの物語として読まれていた（あるいは読むことが可能と考えられていた）ことを示す貴重な資料である。この版は1796年に再版されている。

挿絵を見ると、口絵及び表題紙のものを合わせて12点が用いられている。そのうち、鳥の視点で描かれたものが6点、人の視点で描かれたものが6点（うち鳥の姿を認められるものが3点）である。口絵に大きくこまどりを描き〔図1〕、タイトルと共にこまどりの物



図1 Darton and Harvey 版口絵

語であることを前面に出している⁸。小さな鳥の描き方がいささか稚拙であることは否めないが〔図2〕、

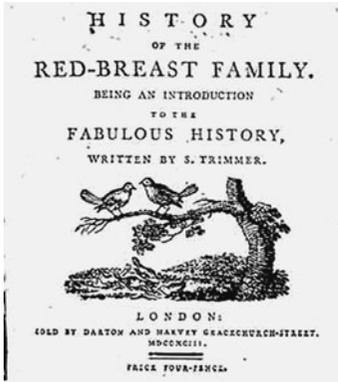


図2 同 表題紙



図3 同 挿絵の例

鳥をなるべく画面に入れようとしていること、こまどりの巣の様子や子どもがこまどりに餌をやる場面〔図3〕、子どもが巣をのぞく場面など、後の挿絵でも描かれている場面がすでに採用されていることが注目される。本文73ページ分の中に10点の絵が入っているため、挿絵がふんだんに使われているという印象があり、絵でもある程度ストーリーを追える版になっている。

*Mrs. Trimmer. *Fabulous Histories. Designed for the Instruction of Children, Respecting their Treatment of Animals.* 8th ed. 2 vols. London: J. Johnson, F. C. and J. Rivington, Longman, Hurst, Rees, and Orme, J. Harris, J. Hatchard, and B. Tabart. 1807. vol.1: xii, 144pp. vol.2: 164pp.

第8版。初版を踏襲した系列の中で、初めて事件を語る順番の入れ替えや章立ての変更が行われたという点とともに、初めて挿絵を採用した点で特筆すべき版である。

挿絵は表題紙に描かれたものと、各章冒頭のものを



図4 第8版 鳥の挿絵の例

合わせて18点が入っている。人間の視点で描かれたものが13点（うち鳥の姿を認めることのできるものが4点）、鳥の視点で描かれたものは5点（うち鳥だけを描いたものは3点）であった。表題紙に鳥の絵を配することで、鳥の物語ということを前面に打ち出していたものの、総じて人間側に重点を置いて視覚化されていたといえる。

絵の大きさは半ページよりやや小さい。場面全体を描こうとしているのか、いわゆる‘引き’のアンゲルが多く、鳥や人物の細かい表情などは分かりづらいが、細かい線で陰影がよく出ているのが持ち味となっている〔図4〕。挿絵が各章の冒頭に入っているため、ある場面を文字と絵の両方で読者に提示するというより、これから始まる章の内容紹介のような役割を担っている。なお、この挿絵と同じ構図のものは、N. Hailes によって出版された第12版（1818）などにも引き継がれている。

**Fabulous Histories. By Mrs Trimmer; or the History of the Robins. Designed for the Instruction of Children, Respecting their Treatment of Animals.* Illustrated with Twelve Plates. London: Printed by J. F. Dove. 1833. vi, 215. 14.5×9.3.

現在までの調査では、1833年のDove版が、初版に最も近い系列のものとして初めて挿絵を採用したと考えられる。1ページ大の挿絵が口絵を含めて12点用いられている。全て人間の視点で描かれており、そのうちの6点に鳥の姿を認めることができる〔図5〕。挿絵はそれぞれの場面が語られている付近に入れられており、読者は絵と物語を同時に楽しむことになる。



図5 Dove版 口絵
(*Masterworks of Children's Literature* 所収)



図6 Dove版 猫に豚の膀胱をつけて
落とすいたずらっ子 (同上)

1807年のものに比べると繊細な線で描きこまれており、鳥を描くよりも、人間の子どもの可愛らしさを前面に出した挿絵となっている（動物をいじめる少年さえ、どこか愛らしさを感じさせる〔図6〕）。人間、特に子ども中心の視覚化がなされているといえよう。なおこの挿絵は、1844年のThomas Allman版でも用いられている。

2. 19世紀後半の初版系列の版

19世紀後半になると、印刷技術の発達に伴い、絵本や子どもへの贈り物にするための豪華本が出版されるようになってきた。これらは装丁と共に挿絵も凝ったものになっており、挿絵をセールスポイントにする版

も増加した。*Fabulous Histories*にもその傾向は見られる。実例を3つ見ておきたい。

* Mrs. Trimmer. *The History of the Robins for the Instruction of Children on their Treatment of Animals.* with Twenty-Four Illustration from Drawings by Harrison Weir. London: Griffith and Farran. 1869. iv, 141. 20.8×15.5.

20.8×15.5cmと大型のハードカバーで、表紙には金の型押しが用いられた、豪華な造りの版である。事件の省略・教訓性の強化の行われたテキストが用いられているが、挿絵ではこまどりの物語という点が前面に押し出されている。画家は動物の挿絵画家として著名なHarrison William Weir (1824-1906)で、26点の挿絵が入っている（口絵、表題紙、本文中に24点。なお表題紙にもWeirの名が記されている）。26点のうち、こまどりの登場するもの15点、こまどりは登場しないが、それ以外の鳥（ひばりなど）が描かれたもの7点、鳥の登場しないものは6点（人間のみ1点、人間と鳥の巣1点、人間と動物1点、動物のみ2点）である。全て細かい線で丁寧に書き込まれているが、特に鳥を中心に描いたものは、動きが生き生きと表現されており、鳥ならではのしぐさの愛らしさと同時に、その場面での鳥の感情が伝わってくるような絵である〔図7〕。Weirの絵は後の版でも広く用いられ、本作品の代表的な挿絵となっている。



図7 Weirの描くこまどり (1869)

*Mrs. Trimmer. *The History of the Robins.* with 70 Illustrations by Giacomelli, Illustrator of “The Bird.” London: T. Nelson and Sons. 1875. xiii, 234. 20.0×15.5.

こちら表紙には金の型押しが用いられた、豪華な装丁の版である。本文も旧来の③の系列のものが用いられている。挿絵は表題紙で ‘Illustrator of “the bird”’ と紹介されている Hector Giacomelli (1822-1904) のものが約70点入っている。大半が鳥を描いたもので、人間は、こまどりの巣を覗く庭師、少年、少女の各1点と、*The Babes in the Wood*⁹を描いたもの1点の4点のみである。(他に植物のみを描いた装飾的な絵や農場風景など、鳥の姿のないものが14点ある。) 章の冒頭部での枠取りや、章末などに小さく置かれたものもある。[図8]のように、けがをした雛が道端で人間に保護される章の冒頭部に鳥の巣の絵があるなど、必ずしもその時語られている物語と一致する絵が入っているわけではなく、Weirのものとは比べると装飾性が強い。鳥の描き方は、美的な構図と、羽毛を細かい線で表現した繊細さが特徴である [図9]。この版の挿絵の構図は、Weirのものとならんで、後に述べる再話版の挿絵で真似られており、本作品の種々の挿絵を代表するものである。



図8 T.Nelson and Sons版 第16章冒頭部



図9 Giacomelliの描くこまどり (1875)

*Mrs. Trimmer. *The Story of the Robins Designed to Teach Children the Proper Treatment of Animals.* With Illustrations Printed in Colours by Edmond Evans from Original Designs. (The Lansdowne Gift Books) London: Frederick Warne and Co. 1870. 160. 18.3×13.6

19世紀後半にはカラー印刷の技術が発展し、絵本や児童書にも頻繁にもちいられるようになった。この版では表題紙に “with Illustrations Printed in Colours by Edmond Evans” とうたわれており、カラーの挿絵が売り物の一つになっていた。Conclusionを除く各章の冒頭に1ページ大の挿絵が入っている。計16点のうち、鳥を中心に描いたものは1点のみで、人間を中心にしたものが15点(うち鳥を含むもの7点)である [図10]。鳥の挿絵を前面に出したものが多くなる中で、人間中



図10 Frederick Warne and Co.版より

心の挿絵を用い、テキストとしても1807年の第8版を踏襲している。カラーの挿絵という新機軸を打ち出してはいるものの、内容的には旧来のスタイルをひきついで版になっている。

3. 19世紀末以降の再話本

19世紀末以降の再話本では、編集の方針や、おそらくは費用の点で、挿絵を1点しか入れていないものから全てのページに入れたものまで、絵の用い方は様々である。従来の絵の構図を真似るなどそれぞれの版に特徴がある。

* *The Robins*. Edited by G. H. Sergeant (Late Head Master, St. James 'Boys' School, Dover). Illustrated by Harrison Weir. Griffith Farran Okeden & Welsh. 1887. 64pp.

“The Story Book Readers for Six Year Old Scholars”の1冊として出版されたもので、再話・要約版としては1793年のものを除くと早い時期のものである。内容面では、いくつかの出来事を重点的に取り上げ、他を大幅に省略していることが特徴である。挿絵はWeirのものを、口絵を含めて8点（うちカラー4点）用いているが、全て鳥を中心としたものである。本来とは異なる場面で、異なるタイトルで用いられている場合があるのが面白い。例えば〔図11〕は、元は見つけた



THE GREEDY YOUNG ROBIN—PART 6.

図11 Weirの描く地面の上のこまどり

餌を独り占めした雛が父鳥に叱られる場面の絵だが、この版では巣を離れて無事に地面に降りた場面になっている。

* *Mrs. Trimmer's History of the Robins and Keeper's Travels*. Adapted by Edith Carrington (author of “Workers Without Wage” “A Narrow Narrow World” “A Story of Wings” etc., etc). Illustrated by Harrison Weir. London: George Bell and Sons. 1895. 205pp. (うち *History of the Robins by Mrs. Trimmer* は p. 1~160)

“Animal Life Readers”の1冊で、大英図書館所蔵のものは *Keeper's Travels* との合本になっている。再話の中では比較的ページ数が多く、オリジナルの出来事の省略も少ない。章のタイトルに動物の名前を折り込むなど、動物に関する物語という面を強調している。挿絵はWeirのものを23点採用している。

* Stead, W. T. ed. *The Story of the Robins*. By Mrs. Trimmer. With Fifty-Eight New Drawings. (Books for the Bairns - IX). London: “Review of Reviews” office. n. d. [c. 1895]. 60. 17.7×12.1.

出版年は明記されていないが、1895年に賞を取った商品の広告が掲載されており、1895年以降の出版と考えられる。人間側の事件や親鳥のお説教の部分などを省き、こまどり中心の物語にしている。編者の手による書き加えはほとんどなく、難しい語句を易しいものに代えている他は、基本的にはオリジナルの切り貼りである。短いページ数のものには珍しく初版の文が生きている。

この版の最大の特徴は、本文58ページ全てにページ半分を占める挿絵が入っていることである〔図12〕。絵はおそらく描き下ろしと思われるが、画家名は記されていない。19世紀後半の豪華版の挿絵に比べると、描写の線が荒く、構図もありきたりだが、全58点のうち鳥の視点によるものが42点、人間の視点によるものが16点（うち鳥の姿を認めることのできるものが12点）となっており、鳥を中心とした絵物語のようになっている。

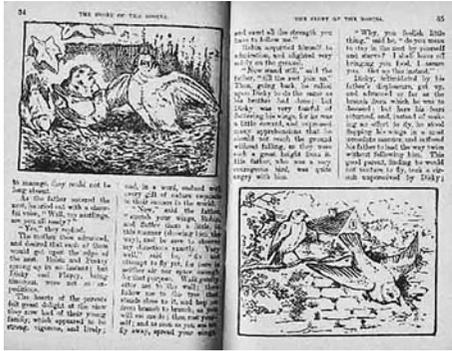


図12 Books for Bairns版本文のレイアウト例

* Trimmer, Sarah. *The History of the Robins*. Edited with Introduction by Edward Everett Hale: Author of “the Man without a Country,” etc. Illustrated by C. M. Howard after Giacomelli, Harrison Weir, etc. London: Society for Promoting Christian Knowledge. 1901. vi, 90. 19.2×12.5.

George Bell and Sons 版と同じCarrington による文章を用いているが、人間の視点による部分がより多く省略されており、若干の相違も見られる。

この版の挿絵は、先行の挿絵の構図を採用したものが多くことが特徴である。口絵を入れて31点のうち、Giacomelli のものの構図を用いたのが（左右逆のものも含めて）17点、Weirのものの構図を用いたのが（同）4点ある〔図13〕。元のものと比較すると、線も荒く、鳥の表情も乏しく、挿絵としての魅力には欠ける。し



図13 SPCK版より。図11の構図を参考にしたと思われる。

かしGiacomelli や Weir の挿絵がよく知られていたことを証明する資料としては面白い。描かれている鳥と人の内訳は、こまどり中心のもの19点、ハトなどこまどり以外の鳥を描いたもの7点、人間視点のもの5点（うち人間のみ2点）である。

* Davidson, Gladys. *The Story of the Robins: Very Simply Told for Infants*. London & Edinburgh: T. C. & E. C. Jack. n. d. [c. 1908]. 32. 17.9×12.5.

大英図書館の蔵書印から、1908年あるいはそれ以前の出版と考えられる。この版も人間の視点で書かれている部分を非常に減らしており、人間の子どもは名前も与えられず ‘boy’ ‘girl’ となっている。表現方法としては所々に詩を挟み、語り口に変化を加えていること、こまどりの鳥としての可愛らしさを表す言葉を加え、読者がイメージを膨らませる助けとしようとしていることが特徴である。

挿絵は家族のためにえさを探すこまどりの口絵（カラー）一点のみである。画家は不明。こまどりの胸の赤が印象的で、文章同様、鳥の可愛らしさを前面に出すことを意図していることがうかがえる。

* Mrs. Trimmer. *The Story of the Robins*. Prepared by Mrs. L. Walker. (the “A. L.” Bright Story Readers No.11 (fifth edition) Edited by Alfonzo Gardiner) . Leeds: E. J. Arnold & Son. n. d. [5th ed., c. 1908]. 36. 18.1×13.8.

The “A. L.” Bright Story Readers の1冊。出版年は記載されていない。今回使用したのは第5版で、大英図書館の蔵書印から、1908年あるいはそれ以前に第5版が出たことが分かる。なお英国の出版目録には少なくとも1951年まで掲載されていた。

挿絵は白黒の4点で、鳥中心のもの2点（呼び合う二羽のこまどり、雛の初飛行）、人間中心のもの2点（鳥にえさをやる子ども、巣をのぞく子ども）と、すべて鳥とかかわりのある挿絵になっている。

* Macleod, Mary *The Robins*: Adapted from Mrs.

Trimmer's "History of the Robins." Illustrated by Harry Rountree. London: Wells Gardner, Darton & Co. 1912. vii, 135. 17.4×13.2.

比較的長い読み物として再話された版。内容面では、物語の後半に省略が多いことと、鳥の生態に反する部分をなくそうとしていることが特徴である。文体はオリジナルに近く、原文の持ち味を残している。またこの版は1940年の出版目録にも記載が見られ、比較的後の時期まで入手可能だったことが分かる。

挿絵はHarry Rountree (1878-1950) によるもので、口絵を含めたカラーの1ページ大のものが3点(巣立つこまどりの雛、いじめられるカナリア、傷ついた雛を見つけた少年)、各章の冒頭に約3分の1ページ大で入れられている白黒のものが14点、計17点である(うちこまどりの登場しないのは4点)。各章の冒頭のものにはペン画で、簡潔だが各章のテーマをよく伝えている。こまどりはふっくらした愛らしい姿に描かれている。この版の挿絵では、第5章冒頭の絵に注目したい〔図14〕。こまどりが服を着て手押し車を押している。*Fabulous Histories* のこまどりはあくまでも現実世界の鳥であり、服を着たり道具を用いたりということは一切ない。それはこの版でも同じである。にもかかわらず Rountree がこのような絵を描いているということは、本作品のこまどりが、人間的な要素を備えているという印象を強く与えていたことを示すものだといえる。



図14 Wells Gardner, Darton & Co.版の服を着たこまどり

このようにみえてくると、まず19世紀前半のオリジナル系列の版では、人間中心の挿絵が多く採用されており、読者はこまどりではなく人間の立場から物語をたどることを促されていたことがわかる。内容面でも人間の物語がこまどりの物語とほぼ同じ分量を占めてい

た。しかし同時に、目に付く表題紙に鳥の絵が配されていたり、こまどりを中心に据えた再話版が存在するなど、こまどりを重視する意識の芽生えがあったことも事実である。

やがて19世紀後半になると、挿絵の重点はこまどりに移り、動物や鳥を得意とする画家が起用されるなど、鳥の存在を前面に出した、鳥中心の情景を多く採用する版が増えてきた。ここで注目したいのが、これらの版でも本文には初版の流れを汲むものを用いている点である。先に触れたように、挿絵は読者がその物語について思い描くイメージを大きく左右するものである。19世紀後半の読者は、19世紀前半の読者同様、人間・こまどり双方の物語を読みながら、実はこまどりが前面に配された、異なる情景を思い浮かべていたことになる。19世紀後半は、視覚面が内容面に先行して読者の意識をこまどりへと導いた時代だったといえよう。

そして「こまどりの話」という側面が決定的に強くなったのが19世紀末以降の再話・要約本であった。いずれの版でも再話の方針は、こまどりの物語を軸にすえ、人間に関する部分を大きく削るというものであり、挿絵もそれに呼応して鳥の視点をういたものが多く用いられた。人間の目線で描かれた絵にも、鳥も同時に登場する機会が多くなるなど、内容面・視覚面共に「こまどりの話」を徹底する本作りが行われたのである。

結 論

Fabulous Histories の初版に近い系列のものは、20世紀初頭になると姿を消す。19世紀後半に『不思議の国のアリス』など、教訓臭を排し、子ども読者の共感を呼ぶ作品が輩出した後では、文体の古さや堅苦しさ、教訓を語る部分の冗長さ、更には作品に盛り込まれた動物観などが読者の感覚にあわなくなっていくことなどが理由として考えられる。しかし本作品は、そういった時代にも出版し続けるに足ると思わせる要素をも含んでいた。それは子どもの心情を与えられた雛が様々な経験を重ねるさまを描いた、こまどりの物語

だったのである。

今回検討した1793年の再話から分かるように、本作品を「こまどりの話」と解する動きは初版の出版まもなくからあったが、おそらくは出版の主流であったオリジナル系列の版ではこまどりを重視する意識の表れは遅れていた。しかし徐々に、口絵、タイトル、そして挿絵という、読者（あるいは購買者）の目をまず引く部分に、こまどりの存在を明示するものが現れる。まず視覚面でこまどりという要素の強化が行われ、やがてははっきりとこまどりを軸にすえた再話・要約版の隆盛へと時代は移って行く。

Fabulous Histories は20世紀の動物ファンタジーと比較すると、読者が感情移入すべき雛の活躍のし方が物足りないなど、擬人化の面白さを十分に生かせていない面もあり、今日では子どもの読み物としては役割を終えたものとなっている。しかし本作品の20世紀初頭に至るまでの出版を支えたのは、教訓性ではなく「こまどりの物語」としての面白さであった。100年以上にわたる本作品の挿絵の変遷は、「こまどりの物語」としての読まれ方の歴史を示しつつ、そのことをはっきりと物語っているのである¹⁰。

註

- 1 例えばMargaret Blount は動物の登場する児童文学を扱った *Animal Land: the Creatures of Children's Fiction* (London: Hutchinson, 1974) で “Indefatigable female moralists and educators are responsible for many of the classic didactic tales, from Sarah Trimmer's *History of the Robins* to Margaret Gatty's *Parables from Nature*. . .” (44) と、*Fabulous Histories* を教訓物語の代表例に挙げている。またSheila A. Egoff はファンタジーの歴史を扱った *Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today*. (Chicago: American Library Association, 1988) で “The long life and numerous editions of *The Robins* can surely be attributed more to parental control of children's reading matter than to children's own delight.” と、昔は親が子どもの読む本を決めていたことがこの作品の長命の理由だ、と言っている。(31)
- 2 多田昌美「100年後の *Fabulous Histories* ——英国19世紀末及び20世紀初頭の諸版の分析——」(「梅花児童文学」第6号 1998年7月), 15-31.

- 3 吉田新一「イラストレーションをめぐる諸問題——イギリスのケースで考える」(『メディアと児童文学』日本児童文学学会編 東京:東京書籍, 2003年), 26-38.
- 4 多田昌美「動物ファンタジーの先駆的作品としての *Fabulous Histories* ——こまどりの擬人化を中心に——」(「梅花児童文学」第9号 2001年7月), 1-16.
- 5 Mrs. Trimmer が挿絵を用いなかったのは、子どもの想像力を刺激しすぎないように配慮したためだとする見解もあるが (Mary V. Jackson, *Engines of Instruction, Mischief, and Magic* (Aldershot, Hants: Scolar Press, 1989), 143.) その論拠となる一次資料は筆者が調べた限りでは現在まで発見できていない。
- 6 なお①の系列に属する「第8版」も存在する。この頃は①及び②の系列のものが平行して別々の出版社から出されており、第10版や第12版も二種類が現存している。
- 7 表題紙に著者名がないこと、Darton and Harvey からは Mrs. Trimmer の子ども向けの本は出版されていないことなどから、海賊版ではないかという推測ができる。
- 8 初版のタイトル (*Fabulous Histories. Designed for the Instruction of Children, Respecting their Treatment of Animals*) を直訳すると「動物の扱い方について子どもに教えるために考えられた寓話風物語」となり、ここには「こまどり」という語は含まれていなかった。オリジナルの系列の版のタイトルに「こまどり」の語が加わるのは、1818年のN. Hailes による第12版 (*Fabulous Histories, by Mrs. Trimmer: or the History of the Robins* . . .) である。
- 9 森に置き去りにされた子どもの亡骸をこまどりが落ち葉で覆う、という伝承のパラッド。*Fabulous Histories* 中にこのパラッドへの言及がある。
- 10 本作品に関連した面白い絵本が1870年頃に Frederick & Warne 社から出版されている [図15, *The Robins*]。8点のカラーの絵に文章をつけたもので、こまどりの雛が巢



図15 Frederick & Warne社の絵本
The Robins – a Family History より

で生まれ、育ち、やがて巣を離れて近くの家で餌をもらいに行くようになるまでが描かれている。冒頭の文章や雛が4羽いること、人間に巣を覗かれて怯えたり、初めて巣を離れた日に墜落する雛がいたりといった事件、近くの家で直接餌をもらうことなど、*Fabulous Histories* と共通する要素を多く含んでいる。餌をもらいに行くのがクリスマスであるなど*Fabulous Histories* と異なる部分も多いため、再話群から外したが、影響を受けて成立したものであろうことは推測できる。

※本論文は梅花女子大学大学院で博士（文学）の学位を取得した論文の一部を加筆・修正したものである。

※引用図版のうち図1～4と14は大英図書館所蔵本を、図7と10～12は三宅興子氏所蔵本を使わせていただいた。記して深く感謝の意を表するものである。